外從五位下石見守麻田連陽春　一首【年五十六】

五言和下藤江守詠二裨叡山先考之舊禪處柳樹二之作上

近江惟帝里
裨叡寔神山
山靜俗塵寂
谷閒眞理等
於穆我先考
獨悟闡二芳緣一
寶殿臨空構
梵鐘入風傳
煙雲萬古色
松柏九冬專

『日本書記』に陽春をヤハルと訓ぜる處あり、萬葉にはヤスとよませあり。其の先は朝鮮人なりと云ふ。裨叡、比叡、日枝、皆同じ。此の『懷風藻』の編輯成て後、三十七年、淡海三船卒して後、四年にして最澄比叡山を開く。然らば則ち傳教大師が此の山を開かざる以前より、禪菴か禪房の如きものありしならん。其の事實は杳として今尋ぬべからず。天智天皇の都し玉ふの處、大津は帝里なり、裨叡は神山なり。而して山は靜寂、谷は幽閒なり。等の字誤寫ならん、「谷閒ニシテ眞理等シ」意義を成さず、攢の字を以てすれば韻字として合す。於は歎詞、穆は讃詞。我先考、藤江守より言へば我先考なり、陽春より言へば君先考ならずや。獨悟、眞理を獨悟したのであるか、迷妄を獨悟したのであるか、俗人外の悟りを開きたるなり。闡芳緣、法緣たらん。單に芳緣では山花を賞する意義となる。法の誤寫たる疑ひ無し。寶殿臨空構、是れ傳教大師の前、四十年か四十五年なるか判然せざるが、兎に角、佛殿を建築したるものなり。梵鐘入風傳、寺あり必ず鐘あり。煙

雲萬古色、松柏九冬專、裨叡を觀れば、煙雲が蒼奔として萬古の色を聳かし、而して松柏は鬱茂して冬も猶ほ得意なる如し。

今謂く題目に和詠柳樹作とあり。然らば柳の柳たる狀を描かざるべからず。聊かも柳詠の意なく、反て松柏の事を言ふ。詠ぜんと欲する意あるも、其の意を表はすこと能はざりしならん。後賢は、題目と內容と違背せざることを推敲すべし。

日月荏苒去（トシテリ）
慈範獨依依
寂寞精禪ノ處
俄（カニ）爲（シ）二積草ノ墀（ト）一
古樹三秋落
寒草九月衰
唯餘（ス）兩楊樹
孝鳥朝夕悲

荏苒を匆匆とすれば、佳なるに何の故を知らず。次第次第に去るでは、急速電光の意義無し。慈範は先君子の遺戒。依依は孝子が先子の慈範を思ふて情に堪へざる形容。而して先君子が舊禪處の狀は如何。寂寞して人無く、唯積草の荒涼たるあるのみ。墀は人の通行する石を敷ける庭、寺の庭が草茫茫たり。古樹三秋落、寒草九月衰、先哲曰く、「草疑ふ花の誤」余謂ふ此二句のみ、平仄整正したりとて、他句皆古詩の格、改むるの要なし。草にて意義通ず。草と花と字形大に異る、誤寫の筈無し。唯餘兩楊樹、孝鳥朝夕悲、孝鳥は烏（カラス）の一名。反哺の孝あり。反哺の養を爲さんと欲す、而かも父已に亡（ナ）し。兩株の柳を看て、孝兒が思に勝へざるなり。此の篇に於て初めて柳の事出づ、前首として獨立して居る詩なれば、多少此の意味なかるべからず。惜い哉惜い哉。

外從五位下大學頭鹽屋連古麻呂　一首

春日於(テ)左僕射長屋王宅(ニ)宴(ス)

卜(シテ)居(ヲ)傍(フ)城闕(ニ)
乘(レ)興引(ク)朝冠(ヲ)
繁絃辨山水(ヲ)
妙舞舒(フ)齊紈(ヲ)
柳條風未(レ)煖
梅花雪猶寒
放情良(ヤヤ)得(レ)所(トコロヲ)
願(フ)言(ワレゴトキヲ)若(ニ)金蘭(ノ)

此の詩に於て初めて長屋王とあり、他は一字皆略す、何の所以を知らず。朝冠、長屋王は左大臣の位高きに在り、朝冠中の朝冠なり、乘興の故に引くならん。普通なれば、整(フ)朝冠(ヲ)なるべし。宴會の席所謂無禮講の意味。繁絃辨山水、絃は山の曲もあらん、又水の曲もあらん、聽き得て以て辨ずるなり。妙舞舒齊紈、齊の國より出る紈、卽ち白色の練絹なり。山と水と二、齊紈(ノ)一、此等の句を對(つい)を成さずと云ふなり。柳條、梅花、二句早春の景色。願言は『詩經』の字、古詩に多く用ひ、近體に多く用ひず。金蘭の如き善交を我等は學ばんとなり。

從五位下上總守伊支連古麻呂　一首

五言賀スル二五八年ノ一宴

萬秋長二貴戚一
五八表ス二遐年ヲ一
眞率無ク二前後一
鳴求一ニス二愚賢ヲ一
令節調ヘ二黃地ヲ一
寒風變ス二碧天ニ一
已應ス二蠡斯ノ徵ニ一
何ソ須ヒンルコトヲ顧二太玄ヲ一

此の題目、前に上刀利宣令の詩にあり。抑も我邦にて四十を初老と稱し、宴を開き壽を爲すは、其の始或は天智以前ならんとも思はる。然るに『懷風藻』中已に二人の詩あるに於ては、天武、持統、文武、時代に盛んに之を行ひしものゝ如し、降りて百年後に淳和天皇の天長元年十一月、太上天皇、年登ルニ四十一。行フ二慶壽之禮ヲ一と『續日本紀』に在り。余考ふ、四十を以て初老と稱せば、五十は中老、六十は大老、七十は耄、八十九十は死人同樣とするか。『曲禮』を案ずるに、十年を幼學と曰ひ、二十を弱冠と曰ひ、三十を壯室と曰ひ、四十を強仕と曰ひ、五十を艾カイと曰ひ、六十を耆キと曰ひ、七十を老と曰ふ、而して八十九十を耄と曰ひ、罪あるも刑を加へず。『曲禮』の說、今日より以後、五六百年間は正當の眞理として採用せらるべし。東海姬氏國の月卿雲客が、四十を初老と稱して賀するなぞ、愚劣極る所業なり。幸にして昭和の今日は、此の如き愚劣の徒、跡を絕ち、七十八十にして始めて賀宴を設く。意義の存する所茲に在り。惜い哉、前世の人を喚起して、今日の事を知らしむるを得ざることを。而して此の賀五十八年詩は風顚子の囈語に類して何等解すべき道無し。

隱士民黑人　二首

五言幽棲

試出二囂塵ノ處ヲ一
追尋仙桂ノ叢
巖谿無二俗事一
山路有リ二樵童一
泉石行行異
風煙處處同シ
欲レ知ラント二山人ノ樂ヲ一
松下有リ二清風一

民黑人は野見宿禰ノスクネの後裔と云ふ。

囂塵は城中の事。囂は「カマビスシ」なり。仙桂叢は、山中の意味に看よ。山中は俗事無し、俗事無き處に、樵童有り。樵事は俗事にあらざるなり。泉石は城中無き處、風煙も城中には無し。而して山人の樂は如何。松下に唯清風あるのみ。此の詩は吐屬自然にして、毫も塗澤せず、幽棲の題目に背かざる作なり。山人を山客と改め、有清風を只清風と改むれば、五律の上乘なるものなり。

五言獨坐山中

煙霧辭シ二塵俗ヲ一
山川壯ニス二我居ヲ一
此時能草セレ賦ヲ
風月自ヲノヅカラン輕レ余ヲ

壯の字面白し。能草賦、賦を草するを能くせざるときは、風月の爲めに輕んぜ

らるゝとなり。奇思奇想、超凡と謂ふべし。

釋道融　五首

釋道融者。俗性波多氏。少遊槐市。博學多才。特善屬文。性殊端直。昔丁母憂。寄住山寺。偶見法華經。慨然歎曰。我久貧苦。未見寶珠之在衣中。周孔糟粕。安足以留意。遂脫俗累。落飾出家。精遊苦行。留心戒律。時有宣律師六帖鈔。辭義隱密。當時徒。絶無披覽。法師周觀未踰浹辰。敷講莫不洞達。世讀此書。從融始也。時皇后嘉之。施絲帛三百匹。法師曰。我爲菩提。修法施耳。因茲望報。市井之事耳。遂策杖而遁。【自此以下可有五首詩云爾有疑】

槐市は學校を云ふ。丁母憂は、母の死去に會ふこと。「法華經」は五首弟子受記品に、自分の衣中に寶珠の有ることを知らず、窮子所謂乞食の羣に入て流浪したること。一たび我は乞食にあらず、長者卽ち富豪の子であると知らば、周公や孔子の教は、畢竟糟粕のみ、辛苦して儒學者と爲るの要無し。是に於て出家し、經と律と論との三藏の中、特に戒律を擇んで研究する志を興せしなり。宣律師は、唐の終南山の道宣律師、世に四分律の開祖と稱す。此の律師の著はす『六帖鈔』は傳來して日尚淺し。其の書深玄、披覽する者あらず。獨法師は披覽して、未だ浹辰卽ち十二日間を踰えざるに深義に洞達するを得たり。『左傳』に浹辰之間。而楚克其三都とあり。皇后は聖武天皇の皇后なり。

我所思兮在無漏
欲往從兮貪瞋難
路險易兮在由己
壯士去兮不復還

漢の張衡に四愁詩あり、四首皆五十字を以て成る。此の詩は其の作法に倣ふて、

二十八字を作る。張曰く、我所レ思兮在二泰山一。欲二征從一レ之梁父艱。又春秋の世、燕の荊軻は、風蕭蕭兮易水寒。壯士一去不二復還一と、而して今「楚辭」の作法も加へて、四句共に兮の字を挾入す。良とに辣手とす。無漏は出世間、有漏卽ち世間の反對、無漏の道に向つて進まんと欲するも、貪と瞋と稱する邪魔があつて、我は艱(ナヤ)む。而かも路の險易は其の人の決心に在る。古の壯士は險を視ること易の如く、險に向て一進し、遂に還らず。我も佛道に向て進まんことを決心して、決して本の有漏には還らずとなり。志を言はん欲するに、漢代の古調を學び、筆鋒犀利、眼中敵無し。以て其の道骨稜稜たる風を想見すべきなり。

從三位中納言兼中務卿石上朝臣乙麻呂　四首

石上中納言者。左大臣第三子也。地望清華。人才穎秀。雍容閒雅。甚善二風儀一。雖レ勗二志典噴一。亦頗愛二篇翰一。嘗有二朝譴一。飄二寓南荒一。臨レ淵吟レ澤。寫二心文藻一。遂有二銜悲藻兩卷一。今傳二於世一。天平年中。詔簡二入唐使一。元來此擧。難レ得二其人一。時選二朝堂一。無レ出二公右一。遂拜二大使一。衆僉悅服。爲レ時所レ推。皆此類也。然遂不レ往。其後授二從三位中納言一。自レ登二台位一。風采日新。芳猷雖二遠列一。蕩然時年。

五言飄二寓南荒一贈二在京故友一　一首

遼夐遊二千里一
徘徊惜二寸心一
風前蘭送レ馥
月後桂舒レ陰
斜雁凌レ雲響
輕蟬抱レ樹吟
相思知二別慟一
徒弄白雲琴

「懷風藻」を編する者が、其の人の傳を作るは乙麻呂以外に無し、特に此の人のみ傳を作るは、如何なる理由なるを知らず。古溪案ず。『續紀』【十三】に天平十一年三月庚申。石上朝臣乙麻呂、上坐レ姦二久米連若賣一配二流土佐國一。若賣配二下總國一焉。萬葉中に三首の贈答あり。二首は若賣のもの一首は乙麻呂のもの戀戀たる情緒を見る。思ふに當時の人、その戀中に同情し、罪を得たるを悲しみ、以つて傳を委しくせしものか。左大臣は石上麻呂なり。門地も清華、容姿も閒雅、而して五典と三噴を研究し。兼て詩文を好む。朝廷の譴斥に觸れ、南荒の地に飄寓、屈原の如く淵澤に沈吟し、遂に銜悲集二卷を著はす、【此の本未見】傳於世とあるか

ら流布したるものならん。入唐使に推薦せられ、而かも奉ぜず、結文脱字ありて、此の他解すべからず、遼夐は遠隔の意味。千古寸心は古語なり。古を里として、遠を表はし、寸心は歳月を惜むの意を表はす。蘭は風前に馥香を送り、桂は月後に樹陰を舒ぶ。蘭桂共に香氣を放つもの、以て我の心事の清きを示す。京を想うて天涯を望めば、雁は雲中に鳴く、而して秋日なるが故に、秋蟬が樹を抱て悲吟す。相思知別慟、京に在る人は我を思ひ、南に在る我は彼を思ひ、人は別なり、慟は同じ、而かも如何ともする能はず。白雲琴を彈じて、飄寓の旅愁を慰むるのみ。純然たる五律、寫情寫景共に佳なり。

五言贈二掾公之遷レ任入レ京　一首

余含南裔怨
君詠北征詩
詩興哀二秋節一
傷哉槐樹衰
彈琴顧二落景一
歩レ月誰逢稀
相望天垂別
分後莫二長違一

掾公は未考。案ずるに南荒に在て任に還り以て京師に入るを送る詩なるべし。余含南裔怨、裔は「スソ」なり、國の「スソ」なり。卽ち國の荒裔に居るの怨を含む。然るに君は北征詩を詠じて、市に上る。南北は實際の地理上より言ふ。哀秋節、藩岳が「秋興賦」以來、詩人は皆秋を哀しむ。殊に流寓の人に於てをや。槐樹衰、秋は萬木所謂落葉樹は盡く衰ふ。然るに獨槐樹を指すは何ぞ。『周書』韋孝寛傳に、爲二雍州刺史一。先レ是路側一里。置二一土堠一。經レ雨頽毀。毎須レ修レ之。自二孝寛臨レ州。乃勒二部内一。當レ堠處植二槐樹一代レ之。乃ち知る、路側槐樹の多き、其の衰を

知るの早きなり。又槐は周代盛んに貴んで、廟堂に種うるもの多く、三公の位に、三槐を喩へしてあり。特に此の樹の落葉を看て悲しむ所以なり。彈琴以て日暮の凄氣を忘れ、又月下に歩して孤獨を傷む。而して公と今日天涯に別離す。別離すと雖も、今日までの交情は違はざらんことを希ふとなり。

前首と異なり。平仄法整正せず、殊に、誰逢稀、天垂別、分後なぞの語は、前半四句の住なる點を滅茶滅茶にす。必ずや久しい間の誤寫ならんと思ふなり。

五言贈舊識　一首

萬里風塵別（ナリ）
三冬蘭蕙衰（フ）
霜花逾（ヨ）入（ニ）鬢
寒氣益（ヒソム）顰（ヲ）眉
夕鴛迷霧裏
曉雁苦（シム）雲（ノ）垂（ルルニ）
開衿期（スレドモ）不識
呑（テ）恨（ヲ）獨傷悲

遠地に在る友に寄する詩。風塵別、南と北と、互に風塵を異にす。蘭蕙は、冬九十日を經て葉衰ふ。非情の物然り、有情の者如何。霜花卽ち白髮か鬢上に增すのみなり。而して老人は寒氣に耐へず、寒氣に遇うて眉を顰めざるべからず。夕鴛は、霧裏卽ち池中に霧が籠めて泛ぐ處に迷ふ。曉雁は、天中雲垂れて其の前路に苦しむ。開衿少し「クツロイ」で君を待てども、君は至らず。恨を呑んで傷悲する所以なり。不識は意義を爲さず。不至の誤寫たるや疑ひ無し。古溪案ず贈舊識は乙麻呂が愛姫を指すならん。

五言秋夜閨情　一首

他郷頻夜夢
談與二麗人一同シウス
寢裏歡フコト如レ實
驚前恨泣ク寒
空思向二桂影一ニ
獨坐聽二松風一ヲ
山川嶮易ノ路
展轉憶フ二閨中一ヲ

夫が妻を憶ふ意味か、妻が夫を憶ふ意味か、又情郎が愛姫を憶ふか、愛姫が情郎を憶ふ意味か、總て明白ならず。夜夢の事、明白ならざるが反て明白なるものなり。此の如き詩は、解す可く、解す可らず、要するに夢中に在て讀むべきものなり。起坐して讀むべきものにあらず。古溪案ず閨情は乙麻呂が愛姫を思ふものならん。